能登殿の最期　解答

A　語句の意味と読み

(1)　（力が）匹敵する。対等に戦える。太刀打ちできる。（「かなはじ」で「とてもかなうまい・太刀打ちできないだろう」）　／現代語の「願いがかなう」の意味ではない。相手の強さに及ぶかどうかを言っている

(2)　すぐに。そのまま。　／★現代語の「そのうちに・まもなく」ではない。「やがて続いても飛びたまはず」＝すぐに続いてもお飛びにならない

(3)　兜を脱いだために、結っていた髪がほどけて、髪をふり乱した姿。　／髪を結わない子ども（童）のような頭になることからいう

(4)　（〜という言葉では）言い尽くせない。表現として不十分だ。（「恐ろしい」などという言葉では言い尽くせない）　／★現代語の「愚か」ではない。「言ふもおろかなり」「〜もおろかなり」の形で「〜どころではない」

(5)　少しも（〜ない）。下にある打消の語（ここでは打消の助動詞「ず」）と組み合わせて使う。　／「ちつとも〜ず」＝少しも〜ない。「騒ぐ」はここでは「あわてる・取り乱す」

(6)　弓手＝左手（ここは左の脇）。対になる語＝「馬手」、読み＝めて、意味＝右手（ここは右の脇）。　／弓を持つのが左手、馬の手綱を取るのが右手。安芸太郎を左に、弟の次郎を右にかかえた

B　文法

(7)　打消推量（〜ないだろう・〜まい）。　／「じ」は「む」の打消にあたる助動詞。判官が「（自分は）能登殿にはかなわないだろう」と判断している

(8)　完了の助動詞「ぬ」の終止形。（〜た・〜てしまった）　／連用形「たまひ」に付いているので完了。打消「ず」の連体形の「ぬ」は未然形に付く

(9)　結び＝「けん」。過去推量の助動詞「けむ（けん）」の連体形。（〜たのだろうか）　／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。①の「とや思はれけん」も同じ形

(10)　「かう」＝副詞「かく」のウ音便（「今はかう」で「もはやこれまで」）。「れ」＝尊敬の助動詞「る」の連用形（能登殿への敬意）。「思ふ」に付く「る」は自発（自然と思われる）と説明する教科書もあるので、お使いの教科書に合わせること。　／このあとの「捨てられけり」「立たれたり」の「られ」「れ」も、能登殿の動作に付く尊敬

(11)　強意の係助詞。結び＝「ける」（過去の助動詞「けり」）、活用形＝連体形。　／文末が終止形「けり」でなく連体形「ける」になっているのは「ぞ」の結びだから

(12)　「猛う」＝形容詞「猛し」の連用形「猛く」のウ音便。「とも」＝逆接の仮定条件を表す接続助詞（たとえ〜ても）。　／「いかに〜とも」で「どんなに〜であっても」

C　主語・指す内容・敬意の方向

(13)　判官（源義経）が、能登殿（平教経）に対して思った。　／すぐ前の「判官」が主語。このあと飛び移ってのがれるのも判官

(14)　作者（語り手）から、飛び乗った判官（源義経）への敬意。（尊敬の補助動詞「たまふ」）　／地の文の敬語は、作者（語り手）からの敬意。尊敬語は動作をする人を高める

(15)　能登殿（平教経）が、判官（源義経）と比べて劣っていた。　／★①の主語は判官、③の主語は能登殿。主語が入れかわるので取りちがえやすい

(16)　謙譲語（謙譲の補助動詞「奉る」）。作者（語り手）から、見られる相手である能登殿への敬意。　／見ているのは安芸太郎だが、謙譲語は動作を受ける側（能登殿）を高める

(17)　話し手の安芸太郎から、「猛うましまします」の主である能登殿への敬意。（「まします」は「あり」の尊敬語）　／会話文の中の敬語は、話し手からの敬意。敵である能登殿にも敬語を使っている

D　口語訳

(18)　（その姿は）まったく、あたりを払いのける（ほかの者を寄せつけない）ほどに見えた。　／「およそ」＝まったく・総じて。「払つて」は「払ひて」の促音便

(19)　我こそはと思うような者たちは、近寄ってこの教経に組みついて、生け捕りにせよ。　／「思はん」の「ん（む）」は、下の体言「者ども」に続く連体形で婉曲（〜ような）。仮定（〜としたら）と説明する教科書もある

(20)　たとえ背丈が十丈もある鬼であっても、どうして従えられないことがあろうか（、いや、きっと従えられる）。　／「などか〜べき」は反語。「ざる」は打消「ず」の連体形。訳に「いや、〜」の打ち返しを入れる

(21)　さあ、おまえたち、それならばおまえら、（おれの）死出の山への供をせよ（＝あの世への道連れになれ）。　／「死出の山」＝死者があの世へ行く途中に越えるという山。「うれ」は相手を見下して呼ぶ語

能登殿の最期　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 長刀を脇にかかえこみ、二丈（約六メートル）ほど離れていた味方の船へ、ひらりと飛び移って、能登殿の攻撃をかわした。／後世「八艘飛び」として語り伝えられる場面。勇ましく見えるが、能登殿の強さを引き立てる場面でもある

(23) 義経に逃げられて討ち取る望みが絶たれ、もはやこれまでと死を覚悟したから。武具を捨てたのは降参するためではなく、身軽になって素手で敵と組み合い、最後まで堂々と戦おうとする覚悟の表れである。／★「降参」と書くと誤り。直後に「生け捕りにせよ」と敵を挑発していることが手がかり

(24) 武具を捨て、髪をふり乱して両腕を広げて立つ能登殿の姿が、あたりの者を寄せつけないほどの迫力で、「恐ろしい」という言葉では言い尽くせないほどだということ。／⑥「大童」⑦「あたりを払つて」の描写を受けている。このあと誰も近寄れない

(25) 敵に討たれたり生け捕りにされたりせず、大力の安芸太郎と弟の次郎を両脇にかかえて道連れにし、自ら海に入って死に方を選んだ点。最後まで強さと誇りを失わなかった。／「生年二十六にて」と年齢を添えることで、若い猛将の最期の悲しさも強められている

F　文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) ジャンル＝軍記物語。成立＝鎌倉時代。琵琶法師が琵琶に合わせて語る「平曲」として広く伝えられた。（作者は未詳。『徒然草』には信濃前司行長が作ったという話がある）／和漢混交文で書かれ、冒頭は「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」。全体を無常観がつらぬく

(27) 壇ノ浦の戦い（一一八五年、長門国の壇ノ浦＝今の山口県下関市の海）。平家は敗れて滅亡した。幼い安徳天皇も、祖母の二位尼に抱かれて海に沈んだ。／安徳天皇の入水は、この直前の章段「先帝身投」に語られる

(28) 能登殿＝平教経（能登守。平清盛の甥）で平家方。判官＝源義経で源氏方。義経は検非違使の尉（＝判官）の官職についていたので「判官」と呼ばれた。／義経は頼朝の弟。「判官」の読みは「はうぐわん」（現代かなづかいでは「ほうがん」）

【現代語訳（全文）】

けれども、どうしたのだろうか、（能登殿は）判官（義経）の船に乗り当たって、「それっ。」とねらいをつけて飛びかかったところ、判官は（能登殿には）とてもかなうまいとお思いになったのだろうか、長刀を脇にかかえこみ、味方の船で二丈ほど離れていた船に、ひらりとお飛び移りになった。能登殿は、すばやい身のこなしでは（判官に）劣っていらっしゃったのだろうか、すぐに続いてもお飛びにならない。

もはやこれまでとお思いになったので、太刀・長刀を海へ投げ入れ、兜も脱いでお捨てになった。鎧の草摺も荒々しく取って捨て、胴だけを身につけて、髪をふり乱した姿になり、両腕を大きく広げてお立ちになった。（その姿は）まったく、あたりを払いのけるほど（の勢い）に見えた。恐ろしいなどという言葉では、とても言い尽くせない。

能登殿は大声をあげて、「我こそはと思うような者たちは、近寄ってこの教経に組みついて生け捕りにせよ。鎌倉へ下って、頼朝に会って、ひと言もの申してやろうと思うのだ。寄って来い、寄って来い。」とおっしゃったけれども、寄って来る者は一人もいなかった。

そこに、土佐国の住人で、安芸郷を治めていた安芸の大領実康の子で、安芸太郎実光という、三十人分の力をもつ大力の勇士がいた。自分に少しも劣らない家来が一人（いて）、弟の次郎も人並み以上にすぐれた強い者である。安芸太郎が、能登殿をお見かけ申し上げて言ったことには、「どんなに勇猛でいらっしゃっても、我ら三人が組みついたならば、たとえ背丈が十丈ある鬼であっても、どうして従えられないことがあろうか（、いや、きっと従えられる）。」と言って、主従三人で小舟に乗って、能登殿の船に（小舟を）押し並べ、「えい。」と言って乗り移り、兜の錣を傾けて（身を低くし）、太刀を抜いていっせいに打ってかかった。

能登殿は少しもおあわてにならず、まっ先に進んできた安芸太郎の家来を、すそがふれ合うほど近寄って、海へどぶんと蹴り入れなさる。続いて寄ってくる安芸太郎を左の脇にかかえてはさみ、弟の次郎を右の脇にかかえこみ、ひと締めぐっと締めて、「さあ、おまえたち、それならばおまえら、（おれの）死出の山の供をせよ。」と言って、二十六歳で、海へさっとお入りになった。